

# 聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

## 第2章 モーセの祈り⑤



### とりなし手としてのモーセ

人間の弱さを取り扱う

良い指導力のしるしの一つは、危機に対処する能力です。モーセは、その優れた指導力を多くの機会に示しました。シナイからカデシュ・バルネアへと旅をしたモーセは、再び危機に直面します。「さて、民はひどく不平を鳴らして主につぶやいた。主はこれを聞いて怒りを燃やし、主の火が彼らに向かって燃え上がり、宿営の端をなめ尽くした」（民 11:1）。

罪と神のご臨在とは、互いに相容れないものです。両者は共に存在することができません。モーセは先に、神に、引き続きイスラエルと共にいてくださるよう懇願しましたが、いまや皮肉なことに、そのご臨在が、強力な滅びの炎のように人々のただ中で燃えているのです。「焼き尽くす火」（ヘブル 12:29）にとって、罪とは常に、油にあたるものなのです。いったん逆らってしまったならば、神から逃れる方法はないこと、自分たちの中に神の耳を持つ者はただ一人しかいないことを、イスラエルは経験を通して学びつつありました。「すると民はモーセに向かってわめいた。それで、モーセが主に祈ると、その火は消えた」（民 11:2）

「もうたくさんだ。あなたたちは決して学ぶことがない。結果を受け取るがいい」。モーセがそう言ったとしてもおかしくありません。しかし、彼はシナイ山で啓示をいただいた時のことを思い出していたに違いありません。神が憐れみ深く、恵みにあふれ、忍耐深い方であることを思い出していたのです。彼の心に、さらにとりなしの祈りをする勇気が湧いてきました。火は消えました。私たちにも、そのようにとりなしをしてくださる方がいます。ところが、優柔不断な民という重荷を負うと、敬虔なリーダーの五感も曇ってしまい、視線が固まってしまうことがあります。その結果、リーダーは、神のみことばに信頼するのではなく、自らの苛立ちを表し始めるのです。

モーセは主に申し上げた。「なぜ、あなたはしもべを苦しめられるのでしょうか。なぜ、私はあなたのご厚意をいただけないのでしょうか。なぜ、このすべての民の重荷を私に負わされるのでしょうか。…私だけでは、この民全体を負うことはできません。私には重すぎます。私にこんなうちをなさるのなら、お願いします、どうか私を殺してください。これ以上、私を苦しみに合わせないでください。」（民数記 11:11,14-15）

前章で触れたように、神のしもべたちの中には、人間としての自らの弱さの犠牲となり、死を願って祈る人も

いました。エリヤ(I列王 19:4)がそうであり、ヨブ(ヨブ 6:8)がそうであり、ヨナ(4:3)がそうでした。神はそのような心の吐露はお聞き入れになりませんが、幸いなことに、その根底にある問題を取り扱ってくださいます。神は、私たちの弱さをご存じです。私たちがちりに過ぎない者であることを思い起こしてくださいます(詩篇 103:14)。私たちは苛立ちを覚えることがあります、それを神がお責めになることはありません。モーセに対しても、神は、彼の重荷を分かち合わせるため、彼の上に与えた聖霊を 70 人の長老たちに置くことを優しく伝えましたが、モーセに与えられている聖霊が目減りするというわけではありませんでした。モーセが知る必要があったのは、聖霊は、どのような状況に対処するにおいても十分に力強い方だということでした。人間の失敗をご覧になっても、神の憐れみは依然として損なわれることはないのです。

聖書の中で、心優しく、へりくだっていると描かれているのは、モーセとイエス様だけです(民 12:3、マタイ 11:29)。そして、嫉妬と野心の攻撃を受けるとき、謙遜は最も明るく輝くのです。高慢であり、自分が第一という思いにとらわれていると、復讐をしてしまいます。高慢は復讐を求めるからです。しかし謙遜は、自分を煩わせてくる人々に対し、祈るのです。かつてアロンとミリヤムが、自分たちの兄弟であるモーセを批判し、神から任命されたその地位を奪おうとしました。その結果、彼らは神を怒らせてしまいました。首謀者のミリヤムは、悲惨なツアラアトになるという罰を受けました。普通の人ならば、彼女は正当な報いを受けたと結論づけたかもしれません。しかし、アロンは自分たちの罪を告白し、モーセにミリヤムの赦しを請いました。「それで、モーセは主に叫んで言った。『神よ。どうか、彼女をいやしてください』」(民 12:13)。

これはまさに、「迫害する者のために」(マタイ 5:44)祈るということの素晴らしい模範です。ホールという 17 世紀の英国国教会の司教が、ミリヤムについて次のように語っています。

彼女の愚かな舌は、醜くされた顔によって正しく罰せられ、モーセと競おうとする愚かさは、全ての人々の前に明らかにされた。モーセは打たれたこの姉のために祈った。愛情豊かに、誠実に懇願した。ミリヤムとアロンの嫉妬を、心から完全に赦し、祈ったのだ。

ここで、「彼女をぜひともいやしてやってください」というモーセの願いに注目してみましょう。神はいやしを求めるこの願いをお聞きになりましたが、喜んですぐというわけにはいきませんでした。病人や苦しみの中にある人々のために祈る人々は、時として、いやしばかりを切に願うことで、その苦しみの理由となっているものを見過ごしてしまうことがあります。ミリヤムのツアラアトは、深刻な罪の結果でした。彼女のいやしは、彼女がその罪を不用意にも繰り返してしまわないように、時間をかけてもたらされなければなりません。彼女には、学ぶべき教訓があったのです。

イスラエルの人々もまた、自分たちの不従順と罰から決して教訓を学ぶことがなかったように思われます。しかし、憐れみの心にあふれ、意志の固かったモーセは諦めませんでした。以前にはほとんど絶望していたにもかかわらず、彼は再び、力と信仰に満ちたリーダーとなったのです。彼の懸念は、もはや自分自身ではなく、神の評判とその民とにありました。このことが非常に明らかに見られるのは、神が、イスラエルを滅ぼし、あなたから再び新しい国を作ろうかと持ちかけて彼を試みた時です。

モーセは主に申し上げた。「エジプトは、… 聞いて、この地の住民に告げましょう。事実、彼らは、あなた、主がこの民のうちに … おられるのを聞いているのです。そこでもし、あなたがこの民をひとり残らず殺すなら、あなたのうわさを聞いた異邦の民は次のように言うでしょう。『主はこの民を、

彼らに誓った地に導き入れることができなかつたので、彼らを荒野で殺したのだ。』 どうか今、わが主の大きな力を現してください。あなたは次のように約束されました。… あなたがこの民をエジプトから今に至るまで赦して下さったように、どうかこの民の咎をあなたの大きな恵みによって赦してください。」主は仰せられた。「わたしはあなたのことばどおりに赦そう。」(民数記 14:13-20)

ミリヤムとアロンと同様、コラ、ダタン、アビラムもまた、反逆を企てた者たちです。彼らは密かに謀反を企て、神の権威から切り離された形での祭司の秩序を打ち立てようとしてしました(民 16:1-21)。この反逆に対してモーセは、①自分とアロンが、神が正当にお定めになったリーダーであることを再確認する必要性と、②反逆者たちに裁きが下されることの必要性を感じました。そして同時に、いとも簡単に扇動されてしまった群衆たちに、恐るべき結果が訪れることを危惧しました。「ふたりはひれ伏して言った。『神。すべての肉なるもののいのちの神よ。ひとりの者が罪を犯せば、全会衆をお怒りになるのですか』」(民 16:22)。この祈りにおいて、モーセとアロンは、非常に切迫したとりなしに苦悶していました。しかし、反逆というものは、時として、あまりの墮落に至るがゆえに、どれほど切迫したとりなしをもってしても、裁きからの解放がかなわないことがあります。結果、地は口を開いて反逆した者たちをのみ込み、神がお定めになった信仰のリーダーたちを再確認するとともに、権威に逆らおうとする人間的な努力に裁きを下すものとなりました(民 16:31-35)。

心の定まらない人々は、どこまでそうなのでしょう。下された裁きは、文字通り、反逆者たちをのみ込んでしまいましたが、そのまさに翌日、次のようなことが起こったと書かれています。「… イスラエル人の全会衆は、モーセとアロンに向かってつぶやいて言った。『あなたがたは主の民を殺した』」(民 16:41)。神の怒りは、そのような思慮の無さに対して燃え上がります。パウロは、ローマ人への手紙 1 章 32 節で、そのような空しい人々のことを描写しています。「**彼らは、そのようなことを行えば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行っているだけでなく、それを行う者に心から同意しているのです。**」神に逆らう人々への裁きを目撃することと、彼らを弁護することは、大きく異なります。後者は、彼らを滅ぼそうとする神の裁きを、実質的にもたらしてしまったのです(民 16:45)。

しかし、モーセとアロンは、たゆまぬ祈りととりなしの人でした。彼らは再び「ひれ伏し」(16:45)たのです。二人のリーダーの粘り強さは、あらゆる信仰のリーダーたちがまねるべき一つの模範です。人々の抱える必要に思いを集中しつつ、モーセはアロンに言いました。「急いで会衆のところへ持って行き、彼らの贖いをしなさい」(16:48)。そして、次のように記されています。「**彼が死んだ者たちと生きている者たちとの間に立ったとき、神罰はやんだ**」(16:48)。

また、別の機会には、イスラエルのおもに新しい世代の人々が不平をつぶやいたことで、燃える蛇に苦しめられることとなりました。「民はモーセのところに来て言った。『私たちは主とあなたを非難して罪を犯しました。どうか、蛇を私たちから取り去ってくださるよう、主に祈ってください。』モーセは民のために祈った」(民 21:7)。人々の苦悶に満ちた願いは注目に値します。というのも、この箇所は、人々がモーセのとりなしを率直に求めているできごととしては、記録上、唯一のものだからです。深刻な事態に直面した彼らは、モーセのとりなしに完全な確信を表しました。そのような確信はまさに、何度も繰り返された体験を通じて学習されたものでした。

しかし、モーセの祈りは、人々が期待したような形では答えられませんでした。彼らの望みは、蛇が取り去られることでした。神は、蛇にかまれた者たちに対し、祈りの答えを得る過程に参加して欲しいと考えておられたのです。「すると、主はモーセに仰せられた。『あなたは燃える蛇を作り、それを旗ざおの上につけよ。すべてか

まれた者は、それを仰ぎ見れば、生きる』(民 21:8)。信仰と組み合わせられないならば、祈りに価値はほとんどありません。そして、わざの無いところ、信仰は存在しないのです(ヤコブ 2:14-16 を参照)。

## ? 質問

1. モーセが示した良い指導力の一つは何ですか？ モーセは民がしゅにつぶやいたときにどのような行動を取り、良い指導力を現しましたか？
2. モーセでも民の態度に苛立ちを表したことがありました。あなたも自分の状況で自らの苛立ちを抑えられなかったことがありますか？ そのような時、神はどうかさいますか？
3. 嫉妬と野心の攻撃を受ける時に、高慢と謙遜はそれぞれ違った反応をします。モーセはどちらの反応をしましたか？ あなたの反応はどちらですか？
4. コラ、ダタン、アビラムの反逆に対して、モーセはどのような必要性を感じ、民のためにとりなしましたか？ それでも神の裁きが下されたことは私たちに何を教えていますか？
5. モーセのとりの祈りに新しい確信を与えられたものは何ですか？ あなたは、神ご自身と出会うことによって確信が与えられ、さらに祈ることができたという体験がありますか？
6. 今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられましたか？ どんなことを実践したいと思いますか？